

〔共済連だより〕

家畜診療日誌

西部基幹家畜診療所 松山 雄喜

今年4月にNOSAI岡山に就職し、およそ5ヶ月が経過しました。北海道の大学に通っていましたが、十勝地方では草場が広がっており、牛が数多く飼養されています。そのため、授業だけではなく日常生活においても牛と関わる機会が多く、また大学時代に通っていた乗馬クラブでは多数の大動物獣医師が所属しており、その方々と接する中で、「大動物獣医師の道に進みたい」と思い、岡山でお世話になることになりました。

5月より本格的に往診に随行するようになり、そこで気付いたことはまず大学時代から一通りやってきたはずの保定や注射法等がまだまだ甘かったことです。大学の研究室で3年間、大学への搬入牛を扱い、また往診にも随行していましたが、実際現場へ出て一人でやってみると全く出来ません。大学時代は周囲に人が多くいたためサポートがあり、しっかりと出来ているよう感じていたのです。保定といえば診療や注射等、何を行うにも必要であり、最も重要な技術です。無理な保定は逆に暴れる原因にもなります。そのため、悪戦苦闘しながらも先輩獣医師や農家の保定を見て、人も牛も無理のない安全な保定法を習得出来るよう頑張っています。

ようやく慣れてきた6月、私を初心に戻す事件が起きました。それは、毎月行っている放牧衛生に行った時のことです。いつも通りワクチンを接種していたのですが、接種した後、不用意に後ろを歩いてしまいました。すると、牛は急に真後ろに足を上げ、伸び切る寸前の最も痛いと思われる蹴り方をされてしまいました。その瞬間前がくらし、針等を落とさないように後ろに逃げるのが精一杯でした。夏の暑さに加え、就職して3ヶ月目

のようによく慣れてきたタイミングで、すっかり私は、牛は蹴る動物であるということを忘れていました。牛は「まだまだお前が基本を忘れるなんぞもつての外だ」と言っているかのようでした。この出来事を教訓として、「体を完全に付ける」、「蹴られない位置に立つ」など、基本的かつ当たり前なことを、より一層注意し診療を行うようになったのは言うまでもありません。

最近一人で往診に行くようになり、今まで以上に牛から発せられる情報を感じ、畜主の話を聞き、飼養環境を見て総合的にどんな状態であるのか考えるよう意識するようになりました。先輩獣医師達は当たり前のこととしてやっておられるようです。しかし、先輩獣医師から「食ってないといっても何をどれだけ食べているのか、どのくらい食べなければならない牛なのか」といったことを聞かれました。食欲不振と一言言ってもさまざまな状態が考えられるためです。また、一見同じような症状の牛にしても、この牧場ではどういった症例が多いかなど、今までの経験の蓄積もあり、より適格な治療判断を行っているように感じます。その継続が農家との信頼関係につながるものと思いました。

今は先輩獣医師や農家から学び、治療する牛を一頭一頭心こめて診療する中で、自分の経験を増やし、自分を一回りも二回りも成長させ、治療のみならず飼養環境等、多方面から農家や牛をバックアップ出来る様に頑張りたいと思います。